

二〇二二年度B

国語 (60分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから27ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

一九七六年の夏、アメリカの大学で教鞭をとる龍夫はその任務を終え、さしあたってしなければならぬことがなくなった。妻の弓子は、日本に帰国する前にヨーロッパ周遊旅行をしたいと提案した。かくして、龍夫と弓子は、就学前の息子である獺と鈴を連れてヨーロッパを旅行することになった。以下は、四人のロンドン滞在中の場面である。

聖ジエームズ公園。葉の多い枝を重たげに垂らした大木が発散する活力素を肺の底まで吸い込むと、弓子はたちまち生気を取り戻した。夏だというのに早くも落ちこぼれた葉が茶色に乾いて、芝生の上にもつもっている。木々の向こうで、^aフンスイが白い花火のようなしぶきを上げている。木洩れ陽が芝生の上に小さな丸い光を泉に投げ込まれた硬貨のようにきらきらと落としている。

「どうしてこの光が丸いのか知ってる、獺？」と弓子が訊く。

「知ってる」と獺が答える。

「どうしてなの、お兄さん」と鈴が訊く。

獺はめずらしく、^bキゲンよく、重なり合う葉の隙間が針穴写真機のように働くのだ、と説明するが、鈴にはちんぷんかんぷんだ。

よく聞きもせずとんちんかんな質問ばかりするので、獺はすぐに、「馬鹿だな、お前は」と怒鳴り出し、ついでにこぶしで鈴の頭を^cナグりにかかる。こぶしが頭に触れもしないうちに、鈴は、「あ、痛い」と大げさにわめいて、兄につかみかかって行く。つぎの瞬間、芝生は^dソウゼツな決闘の場に変わった。

「ここならいいよね」と弓子と龍夫は笑って見ている。

「ずっと大人しかったんだから」

兄弟喧嘩がここ数日 **A** 減っていることに弓子は気づいた。とつくみ合いはまもなく仔犬のじゃれ合いになり、羚が **C** ホガらかな笑い声を上げた。

「歩こうよ」と龍夫が弓子を促し、二人で先に歩き出すと、しばらくしてはるか後方から、「お父さん、お母さん、待ってえ」と叫ぶ声がして、**①** 猥と羚が両手で空を掻きながら走ってくる。

「ああ、疲れた」と羚が息をはあはあさせる。

「お父さんがおんぶしてやろうか」と龍夫がしゃがんで背中を差し出すと、羚は勢いよくとびついたついでに肩車をせがむ。龍夫は羚を肩に乗せ、兎とびで鍛えた脚で造作なく立ち上がる。羚は父親の頭に顎を乗せ、「家なき子」の猿將軍のように威張りくさって、ちよつと広くなつた世界を睥睨する。弓子は猥の傍に寄って、手を取り軽く握る。猥は払いのけもせず、黙ってされるがままになっている。聖家族、という言葉がふと浮かんだ。家を離れて漂っているとき、親子は家庭の埃を払い落して、家族そのものの上昇する。**②** 家庭は諸悪の温床だ。似たり寄つたりの幸福な家庭を築くために、親は子に子であることを強制し、子は親に親であることを強制する。それぞれが自分に合わない役割をふり当てられ、それぞれが借り着の暴君になって、お互いの首を締め上げる。親兄弟への恨みや憎しみを暖めながら、それを孵化させることを諦めて、つぎの世代の家庭にそつとパスするだけで一生を終える。人類史というものがもしそういう世代交替のメカニズムにすぎないなら、どこかで **B** その連鎖を断ち切ってしまう方がましだ。ゴルディアスのもつれた結び目のように。健全な家庭のみせかけの下で、一つ一つの魂がそれぞれの業にあえているのだ。その業を雄々しく生きなくて、人生は何だろう。ギリシャ悲劇はそういう業がぶつかり合う家族の悲劇だ。そこには崇高な率直さが表れている。猥や羚を見ていると、弓子はこの家族がそういう悲劇をはらんでいるように思えてならない。その種子は龍夫の中にもあり、弓子自身の中にもある。心構えはしておかねば。だが、たった今、家族は美しく寄り添っている。

公園の東端から西端まで延びる細長い池に沿ってぶらぶら歩いて行くと、**C** バッキンガム宮殿の前に出た。

「あ、兵隊さんだ」と叫ぶなり、羚は父親の背をすすると滑り降りて、宮殿前の広場を駆け抜けて行った。

くすぐっても身じろぎ一つしないという衛兵の前には^③無情な鉄鎖が張ってあって、くすぐりたくても近寄れない。両脚を八の字に開いて番所を背に立っている衛兵を、子どもたちは飽きもせず胸の高さの鉄鎖を揺すりながらみつめている。大学のような殺伐とした建物に、ライオンやら何やらの装飾を

D ほどこした黒い鉄の門が宮殿らしい華やかさをわずかに添えている。宮殿の正面から横に回るとまた公園があり、誘われるようにその中に入って西の方に歩く。公園を横切って広い通りに出ると、その向こうにまた緑がどこまでも知れずつづいている。

「あれがハイド・パークだよ、行ってみるか」と龍夫がいう。「でかい公園だぞ」

歩くよりほかにすることがないのだから、日が暮れるまで歩こう。どうせ歩くなら街より公園の方が気疲れしなくていい。子どもたちも自由に走り回れるのだし。

「弓さん、ちょっと話があるんだけどさ」とだしぬけに龍夫がいった。

「なに、愛人がいるから別れてほしいって」と弓子は茶化^{ちか}すが、^④胸の中を小さな稲妻が走る。

「それはきみがいつもいたがっているセリフだろ。いいから聴いてくれる？」

「はい、聴きますよ」と答えながら、弓子は龍夫が何をいい出すのか不安になる。新しい考えがひらめいたのだろうか。

「日本にいたときはアメリカも含めて西洋がはつきり外部に見えていたんだけどさ、これは当然のことなんだけどね、アメリカにいと逆に日本が外部というか世界の周縁に見えてきちゃうだろ。そういう反転、つまり自分のいる場所をずらすと内部と外部が入れ替わってしまうことなんだけど、それが自分の中でどうしようもなく起こるんだよね」

「メヴィウスの輪みたいなものか」

「うん、まあそうだ。地と図の反転といってもいいんだけどね。ということは^⑤どっちもリアルでしかも同時にその両方を生きるこ

とはできないってことなんだよ。これは外国に出てみないと実感できないんだな。日本では日本との関係の図式でしか外国を捉えられなかったけれど、アメリカで日本文学を教えながらいろいろ考えていたら、日本がものすごく卑小で非現実的に見えてきたんだ

よ。世界はこっちだ、おれはあんな井の中で何をいい気になっていたんだろうっていやになってくるんだ」

「ところが日本に帰ればまた日本がリアルになって、外国は日本から見た外国、日本に入ってくる外国でしかない、日本にいるんだから日本で問題であるようなことをやらなくちゃただの外国屋になってしまおう、ということなんですよ？」

「そう。日本にいらるとどうしても日本中心でしかものが考えられなくなる。日本はやっぱり島国なんだよな。かといって、アメリカが世界の中心だというわけではない。ヨーロッパももちろん中心なんかじゃないし、何かこう」と龍夫はマージャンの牌をかきまぜるように両手を動かす。「世界が捉えどころなく動いていてね。外国にいらると自分も含めた世界が絶えず動いていて、中心なんてもはないんだってことが手に取るようにわかるんだ」

⑥ 為替レートみたいだ、というとしたが、下らん、おれがいたいのはそんなことじゃない、と龍夫に痛罵されそうな気がして、弓子は類比を一人で楽しむ。二、三日毎に、お札や硬貨の種類や単位を覚える暇もなく、つぎの国に移動するたびに、その国の通貨をなじんだドルに換算して、これは高いあれは安いと一喜一憂していたが、ドルの価値だって日々変わるのだ。もしドル本位の考えを放棄すれば、価値というものがまったく測れなくなってしまう。通貨が通貨を相対化し合い、不断に動きつづける価値の世界。ぶつかり合ういくつもの価格体系の波頭でもみくちやにされてしまい、弓子は今は従順に要求額を支払うだけだ。

「でも、あなたはどこへ行くこうとちゃんと自分を中心に置いて考えている人ですよ。天動説の地球みたいにでんと構えている人だ」
あるいは地動説の太陽のように。でも太陽系は銀河系のはじっこにあって、その銀河系は宇宙のはじっこにあって、宇宙は宇宙で動きつづけて、無限でありながら拡大していることになっている。そんな宇宙になぜ中心とか隅とかの概念があてはまるのか、弓子にはとんと理解できないが、ともかく龍夫は複雑に動くことによって関係が変わってしまう、中心のない世界に一人曝さらされているらしい。これから何を考え出すのだろうか。

「弓さん、ぼく、もうちょっとアメリカにいちや駄目かな。あと半年ぐらい」

「何だ、そういうことだったの、話して。もっと抽象的なことかと思った。それならそんな深刻そうな顔で気をもたせることはなか

ったじゃない」

「いやね、きみに怒られやしないかと思って、いい出しにくかったんだよ」

そういわれると、弓子は怒りたくなってくる。

「日本の大学はどうするのよ」

「その方はどうせ学年なかばだから留学延期届を出せばすむんだよ。もともと一年半いてもいいことになっているんだ」

「お金がないじゃないの」

「ニューヘイヴンにもつといたければあと半年分の金を出してくれるって、主任がいつているんだよ」

「E」

「F」でもこの頃^{ごろ}考えが変わってきてね、こんなからっぽの頭で日本に帰るわけには行か

ない、もう少しアメリカにいれば何かつかめるんじゃないか、という気がしてきたんだ」

「G」

「H」それに今度は教えるんじゃないから、金が出るといってもわずかだしな」

龍夫はやはり地動説の太陽なのだ。輝く中心なのだ。弓子を含めた周囲の人は龍夫を中心に回っている。いつもそうだ。自分は動かなくても、周囲が動いてちゃんとお膳立てするようになっていく。どこまで幸運な人なのだろう、と弓子は龍夫が妬ましい。そして、不調のときは弓子をどこまでも巻き込むが、好調になると弓子を置いて一人で先に進んでしまう。ついて行けなければ、それは弓子が悪いのだ。十一年一緒に暮らしたって、運命というものは共有できない。運命は個人的なものなのだ。きつと龍夫にはそれなりの天命があつて、それを果たすべく生まれついているのだろう。龍夫が必死でそれを追求するのなら、弓子は弓子の運命を一人で生きなければならぬ。ふいに駆け出したくなった。草も生えない荒原が眼^めの前にはてしなくひろがる。⑦そこを全速力で駆け抜けて、地平線までたどり着きたい。

サーペンティン池が見えてきた。ここでヴァージニア・ウルフが入水自殺したという人もいる。本当はウーズ川に身を投げたのだ。たそがれの中で水面は色もなく鈍く光っている。ニューヘイヴンにあと半年も閉じこめられるなら、わたしはきつと死に場所を探してうろつくだろう。泳げないからウルフみたいに水にとび込むのはいやだ。落下恐怖症だからイースト・ロックからとび降りるのもいやだ。首を吊るのは息苦しいし、自動車事故を起こすのは運転が下手だと思われるからいやだ。やっぱり死ぬのはいやだ。わたしはまだ十分生きていない、運命に抗ってでも生きのびてみせる。

「いいわよ、あたしは子どもを連れて先に日本に帰る。獺の学校のこともあるんだし」

「そうするか。きみも早く仕事を探した方がいいからな」

「あたしのことなんかどうでもいいでしょ、大きなお世話よ」

弓子は手を伸ばして、頭の上に垂れかかっている枝から葉を数枚むしり取り、空にむかって投げた。はらはらと落ちてくる葉を追って走り、その一枚を顔で受けとめた。

サーペンティン池のほとりに来ると、弓子はもうけろけろとしてサンダルを脱ぎ、白いパンタロンの裾をたくし上げた。子どもたちには誘いかけ、三人並んで水辺に座って、池にそろそろ足を入れる。水は思ったよりつめたい。

「すごく深いかもしれないだから、足をちょっと浸けるだけよ。それから、池の主に引きずり込まれないように気をつけて」

「池の主、いるの」と獺がまさかと思いつながら興味にかられて訊く。

「この池はサーペンティンっていうんだよ。蛇のことよ。大蛇。大蛇が池の主なんだぞお」

「大蛇、見てみたい」と羚がいう。

「大蛇なら一匹お前たちのうしろにいるから見てごらん」と弓子は巳年生まれみどしの龍夫を指さしている。「気をつけないと蛙かえるみたいに呑み込まれちゃうよ」

⑧ 龍夫は鷹揚おうように笑っている。氣持きもちがふつきれた証拠だ。

【問1】

㉠㉡のカタカナを漢字に改めなさい(楷書で、ていねいに書くこと)。

- ㉠ フンスイ ㉡ キケン ㉢ ナグリ ㉣ ソウゼツ ㉤ ホガらか

【問2】

①「猿と鈴が両手で空を掻きながら走ってくる」とありますが、二人の様子説明として最も適当なものを次の中から選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) 何とかして父母の関心を自分たちに向けたいと思う兄弟が、仲良さげに歩く父母の邪魔をしている様子。
(ロ) 父母の同情を買いたいあまりに、喧嘩の被害者は自分だと兄弟がそれぞれ必死にアピールしている様子。
(ハ) 兄弟でふざけ合っていた先ほどまでの興奮が冷めないまま、はしやぎながら父母を追いかけている様子。
(ニ) 父母の歩みがあまりに速いので、置いていかれるとの不安から兄弟が懸命に父母を追いかけている様子。
(ホ) 先ほどの喧嘩で負傷した足をかばいながら、滑稽に振る舞うことで父母を楽しませようとしている様子。

【問3】

A D
に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ(イ)～(ハ)の符号で答えなさい。

- (イ) とみに (ロ) うっかり (ハ) ばっさりと
(ニ) ごてごてと (ホ) しみじみと (ヘ) ひよっこり

【問4】

②「家庭は諸悪の温床だ」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

弓子は(1)

(イ) 父親に肩車をしてもらって楽しい様子に、兄を気遣えない自分勝手な性格を見る

(ロ) 獺が自分からは父母に甘えない様子に、幼かった獺のたくましい成長ぶりを見る

(ハ) 息子である獺が弓子の手を払いのけない様子に、日常では感じがたい家族らしさを見る

なぜなら、その様子は「聖家族」に例えられるような姿でありながら、一方でそれは、

(二) 自分たち家族が家という環境から離れているゆえに生まれるのだ

(ホ) 自分たち家族が互いを気遣う度量があるからこそ生起するものだ

(ヘ) 自分たち家族が仲の良い家庭を求め続けているから実現するのだ

と弓子はわかっているからだ。

普段の「家庭」での彼らは、いまヨーロッパの地で美しく寄り添っているような「家族」ではないと弓子は考える。そもそも弓子は、「家庭」における「家族」とは、

(ト) 各々の役割を担えない不甲斐^{ふが}なさを互いに許し合うが

(チ) それぞれ課せられた役割を演じることを求められるが

(リ) 必要とされる役割などなかったかのように振る舞うが

(ヌ) 互いに役割を押しつけあって苦しくなる

(ル) 各々の役割を無視して勝手に生きている

(ヲ) 自身の役割を理解することすらできない

、と考えていたのだ。

【問5】

——③「無情な鉄鎖」とありますが、何が「無情」のですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) 子どもたちは普段から衛兵と仲が良いのに、無機質な鉄鎖の設置で衛兵との間に距離が生まれてしまうこと。
- (ロ) 大きな鉄鎖の設置が子どもたちと衛兵の間を引き裂き、衛兵が子どもたちの見世物になってしまったこと。
- (ハ) 豪華^{ごうか}絢爛^{けんらん}な鉄鎖により荘厳な宮殿らしさが演出され、普段着の子どもたちが立ち入りにくくなっていること。
- (ニ) 野放図な子どもたちを頑丈な鉄鎖で遠ざけることで、国家の安全を担う衛兵の威厳を保とうとしていること。
- (ホ) 子どもたちは衛兵に興味津々だが、冷たく重々しい鉄鎖に阻まれ衛兵に手の届くところまでは行けないこと。

【問6】

——④「胸の中を小さな稲妻が走る」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) 自分のことを龍夫が遠回しに責めていると感じて、緊張しつつも反撃の機会を窺^{うかが}っているということ。
- (ロ) 龍夫に軽はずみな冗談を言って傷つけてしまったかもしれないと思い、ひどく後悔しているということ。
- (ハ) 自分たち一家に何らかのよくない変化が起こるのかもしれないと感じて、不安を覚えているということ。
- (ニ) 龍夫が夫としての威厳を見せるために怒り出すのではないかと思って、恐ろしく感じているということ。
- (ホ) 自分たち一家が予期せぬ悲劇に見舞われると確信し、平静を装いつつ内心では混乱しているということ。

【問7】

——⑤「どっちもリアルでしかも同時にその両方を生きることができない」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) 日本にいと日本との関係の中でしか外国を捉えられず、外国にいと日本を中心とする捉え方を相対化できるが、どちらをも現実として同時に体験することはできないということ。

(ロ) 日本にいと日本文学の良さを外国に伝える使命を感じ、外国にいとまだまだ日本文学は評価されていないのだと感じるが、この二つの感覚が同時に成り立つことはないということ。

(ハ) 日本では外国から見た日本文学を論じれば外国屋と言われ、外国で日本文学を論じると世界が狭いと言われるが、これらは同時に成立し得ない都合の良い指摘にすぎないということ。

(ニ) 日本では島国という地形の影響で日本中心の考え方に囚われ、外国にいと自分は井の中の蛙に過ぎないと反省するが、これらの考え方に折り合いをつけることはできないということ。

(ホ) 日本では文学の問題を人生の主要な問題として扱い、外国では文学の問題を趣味の問題として尊重するが、どちらの態度や方法も観念的すぎて、世界の実相を捉えきれないということ。

【問8】

——⑥「為替レートみたいだ」とありますが、どういうことですか。次の説明文の a ～ d に当てはまるものを後の選択肢から選び、それぞれ(イ)～(ハ)の符号で答えなさい。

私たちは、日本にいた時は、日本の通貨「円」によって商品やサービスの価値を把握し、外国にいた時は、その国で目にする値段を自分が慣れている a して、商品やサービスの価値を把握しているかと思っっている。しかし、「為替」という仕組みにおいては、各国のお金の価値は、換算する通貨と為替レートの影響によって絶え間なく動き続

けることになる。つまり、通貨は価値を測るための **b** にはなり得ない。

ここで龍夫は、「中心のない世界」という **c** を主要な関心事として提示している。一方、これまで家計のやりくりを担ってきた弓子は、欧州旅行をとおして為替レートという不安定な指標でモノやコトの価値を把握することに慣れていったのだろう。そのため、龍夫が頭を悩ませる問題を、自分にとって身近な「為替レート」に置き換えることで、龍夫の **d** しているのだ。

- (イ) 価値を具体化 (ロ) 抽象的な問題 (ハ) 絶対的な基準
- (ニ) 相対的な価値 (ホ) 主張を相対化 (ヘ) 通貨単位に換算

【問9】

E **H** に当てはまる会話文を次の中から選び、それぞれ (イ) ~ (ホ) の符号で答えなさい。

- (イ) もちろんぼく一人でいいんだよ、これ以上きみに迷惑かけられないし
- (ロ) そのときはそんなつもりは全然なかったからさ、きみに話す気もなかったんだよ
- (ハ) きみが言っていたとおり、ぼくもアメリカに長くいても仕方ないと思っているよ
- (ニ) あたしはこれ以上あんな何もできないところで中途半端な暮らしをするのはまっぴらですよ
- (ホ) それじゃ、かなり前からその話はあったわけね。どうしてもっと早くいつてくれなかったのよ

【問10】

⑦「そこを全速力で駆け抜けて、地平線までたどり着きたい」とありますが、どういふことですか。これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

十一年のあいだ、弓子は龍夫と夫婦として共に生きてきたはずだったが、いま弓子は、

(イ) 龍夫は自己中心的な性格であり、父親としては慕われていなかった

(1) (ロ) 龍夫は己の道を行く人であり、家族の一員としての自覚がなかった

(ハ) 龍夫には生まれもった運命があり、周囲はそれに振り回されていた

と思う。さらに弓子は、

(ニ) 龍夫の人生を支え続けてきたにもかかわらず、結局自分はその運命にあると気づく

(2) (ホ) 龍夫の人生に伴走してきたように、結局同じ道を歩んでいたわけではなかったことに気づく

(ヘ) 龍夫もその人生を一人で生きる他なく、結局自分はその手助けしかできない存在なのだ気づく

いま自身の運命を生きようと思う弓子の前には、道もない「荒原」が「はてしなくひろがる」が、この表現からは、

(ト) 自身の運命を開拓しようとする弓子の期待と喜びが入り混じる思い

(3) (チ) 自身の運命に子どもたちを巻き込んだことの罪悪感と緊張した思い

が読み取れる。

(リ) 自身の運命がたどり着く先が見えない弓子の不安と寂寞せまぼくとした思い

一方で、「全速力で駆け抜けて、地平線までたどり着きたい」との表現からは、

(ヌ) 現状を抜け出して、自身の運命を生き行こうとする弓子のエネルギー

(4) (ル) 弓子が、子どもたちと新たな家庭をつくりだすために描いた未来予想図

が読み取れるのである。

(ヲ) 自身の荒涼とした心を耕しながら、子どもたちと生み出す穏やかな生活

【問11】

⑧「龍夫は鷹揚たかように笑っている。気持ちがあふつきた証拠だ」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

弓子は、龍夫を大蛇になぞらえて、子供たちに「呑み込まれないように」と注意する。ここでの弓子は、

- (1) (イ) 自分の手で未来を切り拓ひらいて自身の力で生きていく覚悟をすでに決めている
- (ロ) 家族を無意識のうちに崩壊にまで導いてしまう龍夫という存在を認めている
- (ハ) 龍夫とこれ以上生活を共にしていくことができないとあきらめがついている

そのため、アメリカ滞在をめぐる龍夫とのやりとりで生じた感情は和らぎ、

- (2) (ニ) 子どもに対するように、龍夫に慈愛の眼差しまなざしを送るのだ
 - (ホ) 子どものような龍夫の振る舞いをも受け止められるのだ
 - (ヘ) 子どもたちに冗談を言い、場を明るくしようとするのだ
- それは言い換えれば、弓子がここで、

- (3) (ト) 家庭で割り当てられる母の役目を、自ら引き受けたことを意味する
 - (チ) 自らの運命を諦め、母の役割に徹する覚悟を決めたことを意味する
 - (リ) 仕事を得て自活する帰国後の未来に、思いを馳はせたことを意味する
- 一方、龍夫はそんな弓子に

ゆったりと笑う。子どもも反応したこの場の様子を見て、龍夫の「気持ちがあふつきた」と思う弓子の様子からは、

- (4) (ヌ) 弓子がすでに龍夫への愛情を失っており、心の内では龍夫を侮あっていること
- (ル) 弓子がこれまでとは異なる形で龍夫へ接することができるようになったこと
- (ヲ) 弓子は龍夫との夫婦関係を継続することで息子たちの母であるうとすること

が読み取れるのである。

II

次の文章は、第二次世界大戦が終結した一九四五年から、七年が経過した一九五二年（昭和二十七年）に書かれたものです。これを読んで、以下の設問に答えなさい。

*講和論議の際も今度の*再軍備問題のときも*平和問題談話会のような考え方に対していちばん頻繁に向けられる非難は、「現実的でない」という言葉です。私はどうしてもこの際、私たち日本人が通常に現実とか非現実とかいう場合の「現実」というのはどういう構造をもっているかということをよくつきとめておく必要があると思うのです。私の考えではそこにはほぼ三つの特徴が指摘出来るのではないかと思います。

第一には、現実の所与性ということです。

現実とは本来一面において与えられたものであると同時に、他面で日々造られていくものなのですが、普通「現実」というときはもっぱら前の契機だけが前面に出て現実の*プラスティックな面は無視されます。いいかえれば現実とはこの国では端的に既成事実と等置されます。現実的たれということは、既成事実に屈服せよということにはなりません。現実が所与性と過去性においてだけ捉えられるとき、^①それは容易に諦観に転化します。「現実だから仕方がない」というふうには、現実はいつも、「仕方がない」過去なのです。私はかつてこうした思考様式がいかに広く戦前戦時の指導者層に食い入り、それがいよいよ日本の「現実」をのつびきならない泥沼に追いこんだかを分析したことがあります。他方においてファシズムに対する抵抗力を内側から崩していったのもまさにこうした「現実」観ではなかったでしょうか。「国体」という現実、軍部という現実、統帥権という現実、満州国という現実、国際連盟脱退という現実、日中戦争という現実、日独伊軍事同盟という現実、大政翼賛会という現実——そうして最後には太平洋戦争という現実、それらが一つ一つ動きのとれない所与性として私たちの観念にのしかかり、私たちの自由なイメージーションと行動を圧殺していったのはついこの間のことです。いな、そういえば戦後の民主化自体が「敗戦の現実」の上のみやむなく肯定されたにすぎません。戦後まもなく「ニューズウィーク」に、日本人にとって民主主義とは、“It can't be helped” democracy だという皮肉な記

事が載っていたことを覚えています。「仕方なしデモクラシー」なればこそ、その仕方なくさせている圧力が減れば、いわば「自動」的に逆コースに向かうのでしょうか。そうして仕方なし戦争放棄から今度は仕方なし再軍備へ——ああ一体どこまで行ったら既成事実への屈服という私たちの無窮動（ペルペトゥウム・モビレ）は終止符に来るのでしょうか。

さて、日本人の「現実」観を構成する第二の特徴は②現実の「次元性」とでもいまいましようか。いうまでもなく社会的現実はいわゆる「現実を直視せよ」めて錯雑し矛盾したさまざまな動向によって立体的に構成されていますが、そうした現実の多元的構造はいわゆる「現実を直視せよ」とか「現実的地盤に立て」とかいつて叱咤（しつた）する場合にはたいてい簡単に無視されて、現実の一つの側面だけが強調されるのです。再び前の例に戻れば、当時、自由主義や民主主義を唱え、英米との協調を説き、反戦運動を起こす、等々の動向は一樣に「非現実的」の烙印（くわいん）を押され、ついで反国家的と断ぜられました。いいかえればファッショ化に沿う方向だけが「現実的」と見られ、いささかもそれに逆らう方向は非現実的と考えられたわけです。しかしいうまでもなく当時の世界はいたるところにおいてファッショ化の方向と民主主義の動向とが相抗争していました。それは枢軸国対民主主義国といった国際関係についてだけでなく、各々の国内においても程度の差こそあれ、そうした矛盾した動向があったわけです。ファッショ化への動きだけが「現実」で、しからざるものは「非現実」という根拠は（こう）毫もないのであって、もしそうでなければ一九四五年の世界的転換も、あの天気晴朗なる日に忽然（こっぜん）「枢軸」的現実が消え去って「民主主義」的現実がポツカリ浮かび出たというふうな奇妙な説明に陥らざるをえません。また事実、戦時中のように新聞・ラジオなどのマス・コミュニケーションの機関が多面的な現実のなかから一つの面だけを唯一の「現実」であるかのように報道し続けている場合には、国民は目隠しされた馬車馬のように一すじの「現実」しか視界に入って来ませんから、そうした局面のあらゆる転換が全くの「突然変異」に映ずるのも無理はないでしょう。戦後にしても、*中国共産党の勝利や*マッカーサーの罷免など、いずれも私たち日本国民にとっては

A

だったわけですが、実はそうした事件に導く「現実」は前々から徐々に形成されていたのであって、ただ日本の新聞やラジオが故意か怠慢かでそれを充分に報道しなかっただけのことです。戦後、米ソの対立が日を追うて激化してきたことは、

B

子どもにもわかる「現実」にちがひありませんが、同時に他の諸国はもとより当の

米ソの責任ある当局者が何とかして破局を回避しようとするさまさまの努力をしているのも「現実」ですし、C 世界の至るところで反戦平和の運動が——その中に様々の動向を含みながら——ますます高まって来ていることも否定できない「現実」ではありませんか。「現実的たれ」というのはこうした矛盾錯雑した現実のどれを指しているのでしょうか。実はそういうとき、ひとはすでに現実のうちの面を望ましいと考え、他の面を望ましくないと考える価値判断に立って「現実」の一面を選択しているのです。講和問題にしろ、再軍備問題にしろ、それはD 現実論と非現実論の争いではなく、実はそうした選択をめぐる争いにはかなりません。

(中略)

そう考えてくると自ずからわが国民の「現実」観を形成する第三の契機に行き当たらざるをえません。すなわち、その時々々の支配権力が選択する方向が、すぐれて「現実的」と考えられ、これに対する反対派の選択する方向は容易に「観念的」「非現実的」というレッテルを貼られがちだということです。さきに挙げた戦前戦後の例をまた繰り返すまでもなくこのことは明らかでしょう。われわれの間に根強く巣くっている事大主義と権威主義がここに遺憾なく露呈されています。むしろこうした考え方も第二の場合と同様、それを成り立たせる実質的な地盤があるわけで、権力に対する民衆のコントロールの程度が弱ければ当然、権力者はその望む方向に——少なくともある時点までは——どんどん国家を引っばつていけるので、実際問題としても支配者の選択が他の動向を圧倒して唯一の「現実」にまで自らを高めうる可能性が大きいといわねばなりません。古典的な民主政の変質は世界的に政治権力に対する民衆の統制力を弱化する傾向を示しているのです、上のような考え方もそれだけ普遍的となつているともいえませんが、なんといつても昔からE 私たちの国のような場合には、とくに支配層的現実すなわち現実一般と見なされやすい素地が多いといえましょう。この点も私たちの判断をできるだけ総合的にするために忘れてならないことと思えます。

(中略)

私たちの言論界に横行している「現実」観も、ちょっと吟味してみればこのようにきわめて特殊の意味と色彩をもったものである

ことがわかります。こうした現実感の構造が無批判的に維持されている限り、それは過去においてと同じく将来においても私たち国民の自発的な思考と行動の前に立ちふさがり、それを押しつぶす契機としてしか作用しないでしょう。そうしてあのアンデルセンの童話の少女のように③「現実」という赤い靴をはかされた国民は自分で自分を制御できないままに死への舞踏を続けるほかなくなり^{ます}。私たちは観念論という非難にたじろがず、なによりもこうした特殊の「現実」観に真つ向から挑戦しようではありませんか。そうして既成事実へのこれ以上の屈服を拒絶しようではありませんか。そうした「拒絶」がたとえ一つ一つはどんなにささやかでも、それだけ私たちの選択する現実をより推進し、より有力にするのです。これを信じない者は人間の歴史を信じない者です。

(中略)

これに関連して私はとくに知識人特有の弱点に言及しないわけにいきません。それは何かといえば、知識人の場合はなまじ理論をもっているだけに、しばしば自己の意図にそわない「現実」の進展に対しても、いつの間にかこれを合理化し正当化する理屈をこしらえあげて良心を満足させてしまうということです。

F

- (イ) ところが本来気の弱い知識人はやがてこの緊張に堪えきれずに、そのギャップを、自分の側からの歩み寄りによって埋めて行こうとします。
- (ロ) その限りで自分の立場と既成事実との間の緊張関係は存続しています。
- (ハ) 既成事実への屈服が屈服として意識されている間はまだいいのです。
- (ニ) そこにお手のものや思想や学問が動員されてくるのです。

しかも人間の果てしない自己欺瞞ごまかの力によって、この実質的な屈服はもはや決して屈服として受けとられず、自分の本来の立場の「発展」と考えられることで、スムーズに昨日の自己と接続されるわけです。かつての自由主義的ないし進歩的知識人の少なからず

はこうして日中戦争を、大政翼賛会を、大東亜共栄圏を、太平洋戦争を合理化して行きました。一度は悲劇といえましょう。しかし
④ 再度知識人がこの過ちを犯したら、それはもはや茶番でしかありません。

(中略)

それからもう一つ、学者や政治家の間には、再軍備の是非は結局国民自身が決めるべき問題であるという——それ自体まことにも
つともな——議論を煙幕として自分の態度表明を韜晦しようという兆しがはやくも見えております。もつともそこにもまたいろいろ
ニュアンスがあつて、実際は自分の内心の立場はきまつているのだが、現在それを表明するのは具合が悪いので、もう少し「世論」
がそちらの方に動いて来るのを待とう——あるいはもつと積極的には「世論」をその方へ操作誘導して行つてから後にしよう、とい
う戦術派もあれば、また形勢を觀望して大勢のさまる方に就こうという文字通りの日和見派もあるでしょう。しかしながら、いうま
でもなく国民がこの問題に対して公平な裁断を下しうするためには最小限度次のような条件が満たされなければなりません。第一
は通信・報道のソースが偏らないこと、第二に異なつた意見が国民の前に——一部インテリの前にだけでなく——公平に紹介される
こと、第三に以上の条件の成立を阻みもしくは阻むおそれのある法令の存在しないこと、以上です。ですから再軍備問題を国民の判
断に委ねよと主張する人が、いやしくも真摯な動機からそれをいうのなら、彼は必ずや同時に右のような条件を国内に最大限に成り
立たせることを声大にして要求すべき道德的義務を感じるはずで、もし彼がそうした条件の有無や程度については看過し、もし
くは無関心のまま、手放しに国民の判断を云々するなら——もし現在のように新聞・ラジオのニュース・ソースが甚だしく一方的で
あり、また異なる意見が決して紙面や解説で公平な取り扱いをうけず、ソ連や中国の悪口は言い放題であるのに対して、アメリカの
批判や軍事基地の問題はおっかなびつくりでしか述べられないという状況——一言にしていえば言論のフェア・プレーによる争いを
阻んでいる諸条件——に対して何ら闘うことなしに、ただ世論や国民の判断をかつぎ出して来るならば、^⑤ 私たちはそういう人たちの
議論に誠実さを認めることはできません。それらの人は何千万の国民の生死に関係する問題に対しても一段高い所に立つて傍觀者
的姿勢をくずさず、むしろそうしたとりすましたジェスチュアのうち、^⑤ 叡智を誇ろうとする偽賢人か、さもなければ、現在のマス・
コミュニケーションにおいて上のようなフェア・プレーの地盤が欠如していることを百も承知で、逆にそれを利用して目的を達成し

ようという底意を持った政治屋か、恐らくそのどちらかでしょう。

「講和論議」……………敗戦後、米国の占領下におかれた日本は、一九五一年に調印されたサンフランシスコ講和条約によって主権を回復し

た。しかし、ソ連や中国など社会主義国家との間には講和条約は締結されなかったため、「単独講和」と称された。当時、すべての交戦国と講和条約を締結すべきだとする「全面講和」論も盛んだった。

「再軍備問題」……………朝鮮戦争（一九五〇～一九五三年休戦）に出動した在日米軍の空白を埋めるため、GHQ最高司令官マッカーサーの指示に基づき、現在の自衛隊の前身である警察予備隊が編成された。当初より日本国憲法第九条との矛盾が指摘され、社会的に大きな問題となった。

「平和問題談話会」……………全面講和や軍事基地反対を訴え、戦後日本の平和運動に大きな影響を与えた知識人団体。筆者の丸山真男はその活動の中心を担った。

「プラステイック」……………ここでは「可塑的」の意味。加熱によって容易に成形できるところからいう。

「中国共産党の勝利」……………日本の敗戦後、中国では蔣介石の国民政府と中国共産党との間に内戦が起こる。農民の支持を得た共産党はこの内戦に勝利し、一九四九年に中華人民共和国を樹立した。

「マッカーサーの罷免」……………朝鮮戦争勃発後、マッカーサーは米国を中心とする国連軍司令官に任命される。しかし、強硬策を主張したマッカーサーはトルーマン大統領と対立、一九五一年四月に罷免された。

【問1】

——①「それは容易に諦観に転化します」とありますが、どういふことですか。次の中から最も適当なものを選び、

(イ) (ホ) の符号で答えなさい。

(イ) 「現実」を改善することは、多くの人々が同じ目標に向かって努力しなにかぎり不可能であると考えようになる、ということ。

(ロ) 「現実」は過去によって規定されるので、これまでに犯した過ちを反省し続けなければならないと考えるようになる、ということ。

(ハ) 「現実」はすでに存在しているのだから、自らの働きかけによって変化させることなどできないと考えるようになる、ということ。

(ニ) 「現実」とは誰も無視できないものであるため、いたずらに混乱を及ぼす言動をとるべきではないと考えるようになる、ということ。

(ホ) 「現実」とは常に移り変わるものであるから、いま直面している事柄だけを問題視しても意味はないと考えるようになる、ということ。

【問2】

——②「現実の一次元性」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

戦前の日本社会にあつては(1)

(イ) 「現実的」な選択が「反国家的」とされた
(ロ) 戦争は「非現実的」な想像上のものだった
(ハ) 戦争に向かう道だけが「現実的」とされた

。しかし、現在の視点からすれば、当時「非現実的」とされたものが、「現実的」な選択だったとも考えられる。この例に見られるように、

(二) ある特定の方向性が重視されて、「現実的」という判断がくだされがちである
(ホ) 「現実的」という判断は、一人一人の見方によって大きく異なるものである
(ヘ) どんな専門家にとつても、「現実的」という判断は本来ありえないものである

しかし、社会的現実とは本来(3)

(リ) その実態の把握ができないほど流動的である
(ト) その時どきの世論の動向によって左右される
(チ) 多種多様な要素が折り重なって形づくられる

という事実を忘れてはならない。このことをふまえれば、「現実を直視せよ」といった言葉を発する者は、実は、

(ヌ) 自分にとって都合のいい「現実」を選び取っているにすぎない
(ル) 「現実」の行方を案じる思いをそのまま表しているにすぎない
(ヲ) 自分にとって望ましい「現実」の姿を明確に思い描けていない

ことがわかるだろう。

【問3】

A

E

に当てはまる表現として、適当なものを次の中から選び、それぞれ(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

い。

A

(イ)	寝耳に水
(ロ)	豚に真珠
(ハ)	鶴の一声
(ニ)	他山の石
(ホ)	知らぬが仏

E

(イ)	あごで人をつかってきた
(ロ)	うだつがあがらなかった
(ハ)	火中の栗をひろってきた
(ニ)	大風呂敷をひろげてきた
(ホ)	長いものにまかれてきた

【問4】

B

D

に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ(イ)～(へ)の符号で答えなさい。

(イ)	まるで	(ロ)	決して	(ハ)	さらに
(ニ)	いまだ	(ホ)	むろん	(へ)	いかに

【問5】

——③「現実」という赤い靴をはかされた国民は自分で自分を制御できないままに死への舞踏を続けるほかなくなります」とありますが、これに関する次の説明文の a b c に当てはまる語句を、指示された文字数にしたがって本文中から抜きだし、解答欄に記しなさい。

日本の人々の傾向として、 a (4字) による判断こそが、「現実的」な選択だと無批判に考えがちである。しかし、そのような一方的な「現実」観にとらわれてしまうと、 b (9字) が不可能になってしまい、人々の生活は a の思うままとなってしまうだろう。ちょうど、見栄えの良い赤い靴を履いたことで終わりのない舞踏を踊り続けざるをえなかったアンデルセンの童話の少女のように。アジア・太平洋戦争への道すじは、その一つの例であるといえる。だからこそ私たちは、その「現実」観を克服し、 b によって自分たちの真の現実をつかみとり、 c (5字) をより豊かなものとしてつくり上げていかなければならない。

【問6】

F の (イ) (二) の各文を、意味が通るように並べかえて、その符号を解答欄の指示にしたがって答えなさい。

【問7】

——④「再度知識人がこの過ちを犯したら、それはもはや茶番でしかありません」とありますが、どういことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) 高度な専門的知識を持つ知識人が、近い過去に起こった出来事を無意識のうちに反復してしまうことは、これまでも何度も起こってきた事実である、ということ。

(ロ) 学問研究を専門にしているはずの知識人が、歴史的経験に学ぶことなく同じ間違いを繰り返すことは、知識人という名に値しない愚かな振る舞いである、ということ。

(ハ) 現代政治の情勢に対して客観的な分析を試みようとする知識人でも、一般の人びとと大差のない認識しか持っていないことは、ごくありふれた事例である、ということ。

(ニ) 思想や歴史の専門家として研究をしている知識人が、専門外の分野である政治に手をのばして失敗することは、知識人がみずから学問を裏切る行為である、ということ。

(ホ) 学識をより深めることを目指すべき知識人は、過去の苦い経験があるからといって、それにとらわれて自らの学問の歩みをとめてしまってはならないのである、ということ。

【問8】

——⑤「私たちはそういう人たちの議論に誠実さを認めることはできません」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) 学者や政治家は、国民がくだす決定が重要だと主張する前に、メディアを通して国民に提示されている不公正な「現実」を批判し、改善しようとする努力をしていく必要がある、ということ。
- (ロ) 学者や政治家は、「現実」を目の前にした時の国民の意見は常に揺れ動くものであることを認識しないまま、世論の重要性をいたずらに強調する無責任な態度をとりがちである、ということ。
- (ハ) 学者や政治家が、国民に冷静な判断を求めるのならば、自国の優勢のみを伝える戦争報道のあり方を、ありのままの「現実」の戦況を伝える公平なものに改めなければならない、ということ。
- (ニ) 学者や政治家が、メディアにおいて政治的な問題ばかりを大きくとりあげるのは、国民にとっての「現実」の多くの部分を結果として無視してしまふ、不公平な振る舞いである、ということ。
- (ホ) 学者や政治家の、国民の意志を尊重するという主張は公平な態度のあらわれのようだが、そう主張する者は、自分自身も国民の一員であるという「現実」を受け入れてはいない、ということ。

【問9】 本文の内容と合致するものを、次の選択肢より2つ選び、(イ)～(ト)の符号で答えなさい。

(イ) 知識人は、不公正な社会のありかたを分析し批判する理論をもっているのだから、言論の力によって一般の国民を望ましい方向へ先導することによって、いまあるものとは異なる新しい世論を作り出していく責任を有しているといえる。

(ロ) どのような時代にあっても、その時その時の「現実」には様々な動向が矛盾しながら同時に存在しているのであって、「現実」のあらゆる側面を公平な形で人々の前に明らかにしていくといった作業は、実際のところ不可能に近いのである。

(ハ) 過去の積み重ねによって形成されていく「現実」を、人々の意志によって「非現実」なものとすることは不可能だが、終戦という大きな歴史的転換点においては、「現実」が「非現実」的なものとなってしまいうことが実際に起こったのだった。

(ニ) 日本社会において「現実」とは、日々新たに変化していくものとしてではなく、過去にできあがった既成事実としてとらえられがちであるが、そのような「現実」観は、かつての日本において戦争へと突き進む流れが加速する一つの要因となった。

(ホ) 戦時下の国民は、一部の指導者層にとつての「現実」をそのまま受け入れざるをえなかったが、戦争が終わったことによつて、国民みずからが自由な発想を持ち、それを実現することができる新たな民主主義的「現実」があらわれることとなった。

(ヘ) 再軍備問題のような社会的課題に対して国民が適切な判断をくだすためには、国民の判断の材料となる情報を伝えるメディアに偏りが無いのはもちろんのこと、そのようなメディアの公正なあり方を支える法制度がととのっていることも必要となる。

(ト)

戦前から終戦にいたる日本において、新聞やラジオなどは軍部の意向をそのまま伝えるきわめて一面的な報道を続けたことによって国民の信頼を失ってしまったが、そのようなメディアに対する信頼を取り戻すことは戦後における緊急の課題である。

【出典】

I 「冥王まさ子『天馬空を行く』（河出文庫文藝コレクション、一九九六年）二二〇～二二七ページ。

II 丸山真男「『現実』主義の陥穽」（『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、一九六四年）一七二～一八二頁。ただし、

改変・省略した箇所がある。

